

俺の婚約者の娘が小悪魔すぎる



## 目次

- 一章 婚約者の未亡人、悪戯好きな義娘
- 二章 義娘の甘い脅迫
- 三章 義娘との爛れた淫交
- 四章 絡まる関係
- 終章 俺の婚約者、俺の愛人

## 一章 婚約者の未亡人、悪戯好きな義娘

フロントウインドウに透けた信号機が、青から黄色へと移り変わる。アクセルを踏み込めば充分に交差点を通過できる距離だったが、宗田寛人は余裕をもって緩やかにブレーキをかけた。シートベルトへ静かに胸板が押しつけられ、フロントバンパーが停止線に被せられると、見計らうようにして信号が赤に変わった。

(外と違って、風が無いと車内はもう暑くなるな)

季節は四月——春の代名詞でもあるこの月も、桜を舞わせる風はまだ冬の名残を帯びている。一方で、陽光は日増しに厚みを膨らませており、風の絶たれた室内ならばエアコンすら必要としない。春眠の誘いはこの上なく甘美で魅力的だが、ハンドルを握っているのは辞退するしかない。

運転席のパワーウィンドウを微かに下げると、まだ冷たい春の息吹が車内に流入し、曇った暖気が車外へと押し出される。

火照った肌を洗う冷えた微風が心地良く、寛人は「ふう」と一息を吐いた。  
「寛人君、せっかくの休日なのにこんなつまらないことに付き合わせてしまつて……  
本当にごめんなさい」

ついでに襟元のボタンを緩めたところで、後部座席に座っていた妙齢の美女が申し訳なさげに深謝する。寛人としては無意識の内に——というより生理反応に近い吐息だったのだが、他人が見れば退屈で気怠い溜息にしか聞こえなかったのだろう。

バックミラー越しに美女が頭を垂れ、耳にかかっていた艶やかな黒髪がさらりと流れた。

「いや、春眠暁をなんとやら、です。運転中は、僅かな眠気も大敵ですからね。身体の中に籠もっていた熱を吐息と共に押し出しただけです。誤解させてすいません」  
他意などまったく存在しないため、寛人は慌てて真相を告げる。今年二十八歳となる寛人にとつて、ドライブは趣味の一環であり貴重なストレス発散方法だ。アクセルを踏み、ハンドルを切り、風景を滑走させながら機械の塊を自在に動かす楽しみは、男のわんぱくな心へ何者にも代えられない充足をもたらしてくれる。

まして、独りではなく極上の麗女を後ろに乗せているのだから、つまらないはずがない。  
「それに、もうじき俺の奥さんになってくれるとびきりの美人を乗せているんです。つまらないなんて、ありえませんか」

杞憂を吹き飛ばすように、努めて軽妙な口調で心境を述べる。長い付き合いから年下の彼氏が嘘を言っているわけではないとわかつたのだろう。

近い将来に寛人と再婚し、年上の妻となる妙齢の未亡人——樋口千沙子は、不意の讚辞に優麗な柳眉を浮かせた後、微かに頬を綻ばせる。

紅く艶やかな潤いを宿した三十八歳の美唇が、寛人の心臓を不埒に躍動させた。

（亡き旦那さんの墓参りなのに不謹慎だが……何度見ても見惚れてしまう綺麗さだ）

小さな鏡面に写し出された婚約者の姿を、それとなく寛人は眺める。

千沙子の第一印象を決定付けるのは、黒艶を宿した理知の瞳だろう。

全国に展開する有名な通信会社に勤め、三十路で課長職に就いたキャリアウーマンに相応しい鋭い眼差しは、如何に千沙子が犀利富んでいるかを如実に窺わせる。

黒艶を輝かせるミディアムロングヘアはシニヨンに結い上げられ、色気と峻烈を併せた白いうなじが眩しく輝く。睫はふわりと流れ、マスカラをしていないのに双眸の

輪郭を色濃く彩っており、その視線には切れ味すら彷彿とさせた。

気の弱い人間ならば目も合わせられないだろうが、それでも男なら否応なく美熟女の肢体に焦点を合わせてしまっただろう。

男の掌からも零れ落ちる豊熟した乳房。Gカップの膨らみを反動にしてくびれた、危険な魅惑を帯びた艶腰。そこから繋がる艶然たる熟臀に、大人の色気が存分に溶け込んだむっちりとしたふともも。

三十八年かけて理想的に熟れた女の身体は、見慣れた寛人でも時折生唾を呑んでしまふ蠱惑を溢れ返らせている。

(今日は旦那さんの命日なんだから、自粛しなくちゃならない。そんなこと、頭では判っているんだが……)

千沙子より年下とはいえ、寛人も社会人としてそれなりの年月を経ている。会社に勤めて大人の常識を学んだし、学生の頃とは違って成人男性としての節度も身に付けている。

それでも、未だ公的には認められていないものの、内々に婚約を交わした未亡人を見てみると、沸々と愛欲が身体の底から煮立ってきた。

車内に巻いた小さな気流が艶女の甘い香りを運んでくる。就寝中に生産され睾丸を

湛えいた子胤が、壮健な青年の下腹に不埒な熾火をくべていった。

(喪服を着ると一段とエロさが増すから、ちよつとタチが悪い)

女としての魅力は黒一色の厳肅な洋服に押し込められているが、そんなもので艶美な女体を隠しきれはるはずもない。ローヒールを履いても身長は170センチを越えるモデル並みの長身のため、ただ立っているだけでも目立ってしまう。

無論、車中で座していても美麗さに変わりはしない。静かに合わせられた膝が上品に傾斜し、黒ストッキングに彩られたふくらはぎを漆黒に輝かせる。

喪服そのものが意匠・色合い共にシンプルな分、千沙子の艶美を際立てていた。

(もう付き合っても長いのに、近くにいただけで節操なく胸が躍ってしまう)  
真つ当な社会人として成長し、年齢に応じた自制心を兼ね備えているはずなのだが、千沙子を前にすると平常心や理性が著しく鈍る。想いを受け入れて貰い、プロポーズまでしたというのに、未だに初恋染みた高揚が抜けきらない。

寛人の不躰な視線に、未亡人は極親しい者にしか見せない柔らかな微笑みを返す。紅く潤んだ唇が緩やかな弧を描いた。細く柔らかな繊指が春風に弄ばれた前髪を緩慢に梳き、折られた肘が豊満すぎる熟乳を艶やかに陥没させた。

(数日セックスしてないだけで、こんなに歯止めがきかなくなるなんて)

千沙子への愛情が肉欲を唆し、股座の中央から黒く焦げた熱を醸成させてくる。あと少しで三十路になるというのに、元来性欲が強いこともあってか牡の衝動は累月と共に減退していく気配がまるでない。思春期と異なり思考が情動に呑み込まれることはなくなつたが、肉体に刻まれ獣欲は意思を離れて身勝手に振る舞う。

(こんな所で勃起してくるなんて……：我ながら節操がなさすぎる。だろ)

運転中にもかかわらず、むず痒い衝動が臍の下で渦を巻く。上体を遡って来た獣欲が頬を炙り、ズボンに隠された牡の肉蛇が冬眠から目覚めたようにもぞりと蠢いた。

「ふふ、パパったらまたママと話してただけで赤くなってる。ほんと、いつまでたっても可愛いんだから」

「うわっ。ま、真梨奈ちゃん」

真後ろの座席から突然飛び出してきた少女が、ヘッドレストごと寛人の顔を抱きしめてきた。千沙子に見取れていたため、娘の――樋口真梨奈の強引な介入によって、危うく寛人はシートから腰を浮かせかける。この不意打ちが、牡の股間を焦がしていた欲熱を一気に吹き消し、牡肉の暴走がびたりと止まった。

「ママが好きなのはわかるけれど車の中には私もいるんだから、少しは相手にして欲しいなあ。それとも、こんな大きな娘じゃ可愛げがない？」

「そ、そんなわけないだろう。真梨奈ちゃんは可愛いさ。とつても」

牡の身体に生じていた邪な変貌を覚らせまいと、寛人は辛うじて冷静さを取り繕う。

(親子なんだから当然といえば当然なんだけれど、やっぱりよく似ているよな)

顔は正面を見据えたまま、寛人は横目で血の繋がらない娘となる少女をバックミラー越しに見つめた。

今年、齋美市立高校から進学して大学生となった真梨奈は、母親たる千沙子の血を実に色濃く受け継いでいる。高貴な猫を彷彿とさせる切れ長の瞳に、艶美に流れる黒い睫。リップクリームの湿潤が煌めく、健康美溢れる桜唇。千沙子よりも長いロングヘアは結われることなくストレートに流され、煌びやかな黒髪が腰を洗う。

母親とは横並びにならなければ背丈の差がわからず、声質も似ているため同じトーンで話されると電話越しでは区別が付きにくい。

特に今日は母娘揃って洋喪服を着ているため、ファッションセンスの違いすら消失している。外見的な差異といえば、母より一回り小さい――女子大生として過不足無い程よいバストと、女脂の比率が異なる華麗な美脚くらいだ。

いずれ千沙子と同年齢になつたら、さぞかし瓜二つな容姿になるだろう。

(ただ、性格が大きく違うから、物凄く似てないとも言える)

見た目はそっくりな義娘だが、その性格は容姿に反比例するようにかけ離れていた。伶俐な顔立ちから連想される物静かな美女の印象を、千沙子はそのままだ現している。その一方で、黙っているときと見た目だけならクールな美少女なのに、真梨奈は喜怒哀楽をストレートに表現してくるので、受け取る印象が母娘でまったく異なった。

人懐っこい反面、年上である寛人をからかってくるのは日常茶飯事であり、小さい頃からの付き合いもあって、積極的にスキンシップしてきてくれる。

「ホントかなあ。昔はことある毎に私を褒めてくれたじゃない。『真梨奈ちゃんは賢いね』とか『真梨奈ちゃんはとっても偉い子だね』とか」

「そ、それは俺が真梨奈ちゃんの家教師をしていた頃の話だろう。まだあの時は小学生だったじゃないか」

頬に吐息がかかる至近距離から、真梨奈がわざとらしく拗ねる。

（小学生と女子大生に、同じ扱いなんてできるわけない）

まだ女子どころか児童だった頃ならばとにかく、もう真梨奈はファッションだけではなくメイクの楽しみすら覚えてしまった女子大生だ。未成年とはいえ、女子ではあっても女兒ではない。幾らもうじき正式に親子になるといつても寛人と真梨奈に血の繋がりはないわけだし、千沙子がいる手前なので成人男子として節度ある距離感を維

持たなくてはならない。

「……真梨奈ちゃん。いつものことだが、俺を困らせるのが楽しそうだな」

「うん、とつても。これだけでご飯十杯いけちゃう」

寛人の葛藤を理解した上で無理難題を突き付けているだけあって、真梨奈はまったく悪びれない。小悪魔だが類い希な美少女でもある義娘は、母とは異なる柔らかな匂いを零しながらクスクスと微笑んだ。

「真梨奈。停車しているけれど、今は運転中よ。寛人君をからかうのもほどほどにしておきなさい」

当惑する寛人を見かねたらしく、千沙子が静々と娘を諫める。時間切れを悟ったのか、異論一つ唱えることなく真梨奈は「はあい」と素直に引き下がった。首に回されていた纖手が引き戻される途中、名残惜しげに十八歳の纖指が頬を撫でていく。

洋喪服に身を包んだ美少女が、母と並んでようやく座席に腰を降ろした。寛人の動揺に頗る満足したのだろう。美熟女たる母よりもしなやかな美脚でこれみよがしに膝を組み、漆黒のストッキングを煌びやかに輝かせた。

（茶目っ気は旺盛だけれど、母親思いの良い子なんだよな）

隙あらば寛人を弄ろうとする悪癖こそあるが、根はとても素直で真面目な義娘であ

るのは、長い付き合いを通じて把握している。言動こそまだ未熟な女生徒だが千沙子をとっても慕っており、親を困らせている所など見たことが無い。

年齢がさほど離れていないのに、もうすぐ継父となる寛人を嫌がる素振りもなく、頼んでもいないのに「パパ」と呼んで慕ってくる。十しか年の差が無いので「パパ」と呼ばれると寧ろ寛人の方が照れくさかった。

(千沙子さんが妻で、真梨奈ちゃんが娘になるんだ。夫として父として、絶対にこの二人を幸せにしてみせる)

千沙子との結婚を仄めかした際、両親を含めて多くの友人が疑念と難渋を呈した。十歳も年上の女を妻にし、十歳しか年の離れていない娘がいる家族と、円満な家庭を築けるはずがないと、異口同音に並び立てた。千沙子が年齢的に出産が難しく、本人にも妊娠願望が無いことも批判の材料となった。

しかし、外野の懸念は杞憂に終わるだろう。

(子作りはできないが、彼女達と家族になるのはそれ以上の喜びがある)

信号がようやく青に変わった。手慣れた動作でギアを切り替えられ、妻となる美熟女と義娘になる美少女を乗せた車が、低い唸りを立てて走り出した。

寛人が樋口母子と出会ったのは、かれこれ八年ほど前にまで遡る。

当時、寛人は成人はしていたが学生の、しかも仕送りを受ける身分では車など買えるはずもなく、自転車で大学まで疾走する日々を過ごしていた。

千沙子と出会ったのは、二年生となってからまだ間も無い、初夏の陽射しを浴びた新緑の眩しい季節だった。朝の通勤ラッシュが生み出す、無数の喧騒と爆音の大河が敷かれた幹線道路。車ほどではないとは言え、常に一定の人数を流すことが半ば義務づけられた歩道の端で、樋口千沙子は悄然と取り残されていた。

通勤途中に自転車故障したのだろう。千沙子は自転車のペダルや車輪を空転させ、その都度困惑と焦燥に眉根を曇らせていく。人命にかかわるならともかく、幾ら千沙子が美人でも、自転車の不調程度では分刻みで移動を求められる人々の足を止める動機にはならない。通り過ぎる際に横目に流すだけだ。

それは、寛人にしても同じだった。親から仕送りを貰っている手前、大学の講義は一つたりとも無駄にはできない。朝一の講義は重要な割に面白味がなくて退屈だが、時間に厳しい教授だけに遅刻は確実に回避しなくてはならない。

多くの人と同じく、寛人は千沙子を横目に通り過ぎた。

「――あの、どうかしましたか」

あからさまに困っている人に声すらかけない――そんな行為がもやもやとした感情を惹起させ、ほんの一メートルも通過せずにブレーキをかけさせた。

「走っていたら、突然チェーンが回らなくなって……」

寛人を見上げる美女の双眸には、悲惨なまでの焦燥が右往左往していた。まだアルバイトの経験しかない寛人だが、このままでは千沙子が重大な仕事に間に合わないことくらいは察せる。

手入れが入念になされているのだろう。千沙子が着ているスーツには皺一つ無く、草臥れた箇所がまるでない。それなのに、繊細な指先は赤黒いオイルに塗れ、ストッキングに透けた艶美な膝を砂礫混じりのアスファルトに押しつけている。

ストッキングが伝線する可能性を無視し、美しく彩られたネイルに汚れたオイルを染みこむことにすら躊躇していないのだ。

その重要性は、寛人の受講とは比較にならないのだろう。

「急いでいるなら、代わりに俺の自転車を使ってください」

一般の自転車なら寛人でも直せるかも知れないが、千沙子の乗っていたものは電動自転車だ。専門家に任せないと状況が悪化しそうだし、無駄な時間を消費させること

になりかねないのならば、その場しのぎの修理は諦めた方がいい。

見知らぬ男からの唐突な申し出に驚いたのだろう。千沙子は「でも」と躊躇する。

「後で返してくれればいいですから。ええと、連絡先を教えてくださいますか」

寛人が携帯電話を出すと、逡巡を挟んで千沙子が番号を諳んじる。すぐさま当該番号に発信すると千沙子のスーツからバイブレーションの鈍い低音が響いた。これでは信履歴に寛人の携帯番号が残ったはずだ。

「あっ、待って。これ、使ってください」

日常の習慣に擦り込まれているのだろう。携帯電話の着信に反応した千沙子が、汚れた指のままスーツのポケットに手を伸ばしたので、慌てて制止させる。これから仕事に向かおうというのに、指はまだしもスーツを汚したら元も子もない。

やや色の褪せた、お世辞にもお洒落とは言いがたいハンカチを取り出すと、有無を言わせぬ内に千沙子の手へと握らせる。

「こんな……悪いわ」

「どのみち買い換える予定だったから気にしないでください。それより――」

律儀に応じる千沙子だが、こんな遣り取りをしている時間すら惜しいに決まっている。チェーンロックの鍵を取り出して美女の掌に載せると、スタンドを倒してグリッ



プを傾ける。無言の催促が功を奏したらしく、千沙子は一度だけ深く頭を垂れてから寛人の自転車を駆った。

その日の夕暮れに千沙子から連絡が届き、寛人は自転車の返却も兼ねて再び件の美女と再会することになる。千沙子は朝出会った頃とはがらりと表情を変え、柔らかな微笑みを湛えて「大切な用事に間に合った」と、深謝した。

寛人としてはちよつとした人助けのつもりだったのだが、千沙子にとっては自身の進退に直結する重要な案件だったらしい。謝礼金まで出そうとしたのでそこは固辞すると、それならばせめて日を改めて食事だけでもと引き留められる。

それくらいならと深く考えずに了承する寛人だったが、後日、安さと量が求められる大学生の食事と、三十路となるキャリアアウーマンの食事の違いを思い知らされる。

中華といえばラーメンと餃子、あるいは焼売と杏仁豆腐くらいしか連想できない貧しい大学生には、あまりにも縁が無い一流中華料理の数々。円卓に並べられた色取り取りに皿に、寛人は恥も外聞もなく啞然としてしまう。

質素な生活が染みついた大学生に「それじゃ、頂きましょう」と千沙子が箸を促す。最初は躊躇していたものの、特売品で自炊する大学生が食欲に勝てるはずがない。

普段の食生活とはかけ離れた美味の数々に、寛人は緊張を忘れて夢中になる。そん

な寛人の食べっぷりを眺め、千沙子は初めて微笑んだ。

まるで見知らぬもの同士の奇縁だったこともあり、食事をしながらお互い自己紹介を含めて話が進められた。善意の出会いが美女の警戒心を削いだらしく、会ったばかりだというのに千沙子は随分とプライベートな話までしてくれた。

千沙子の勤めている会社は誰もが知る有名所だったが、それだけに内部での競争は激しいらしい。昇進のためには完璧な仕事をして同僚を出し抜かなくてはならず、一つのミスも許されない。

特に、寛人と会った日はクライアントとの重要な案件を締結させるため、絶対に遅刻が許されなかったらしい。あの日はなんとか事なきを得たが、寛人が助けてくれなかったら、出世に大きな影響が出ただろうと、千沙子は感慨深げに溜息をついた。

「千沙子さん、どうしてそんなに出世したいんですか」

端から見れば、寛人の質問は実に間が抜けていると捉えられただろう。上昇志向は、程度の差はあれ子供から大人に至るまで普遍的に備わっている、極当然の欲求だ。

ただ、言葉とは裏腹に、千沙子からは権力への渴望とも言える衝動がまるで伝わってこない。そのちぐはぐさに、寛人は率直な疑問を抱いた。

「私が娘を育てた——って、言い切れる母親になりたいの」

真摯に手助けしてくれた相手故に——だったのだろう。本来ならば他人に話す必要の無い家庭の内情について、千沙子は吐露してくれた。

千沙子は、二年前に交通事故で夫を亡くした。深夜近く、ようやく仕事が終わって帰路に就いていたところを、信号無視をした車に衝突されたらしい。

若くして未亡人となってしまったのも相当な不幸だが、追い打ちをかけたのは夫を迎えに行く車を運転していたのが、よりにもよって千沙子だったことだ。

己の過失ではないにせよ、自分の運転していた車で愛する夫を亡くしたショックから、以後運転席に座ることができなくなったらしい。それだけではなく、娘を産んでも仕事を辞めないことに元より不満を積もらせていた義両親から、息子が死んだのは千沙子の運転の所為だとも暗に責められたらしい。

そうした理不尽な状況に晒された末に、千沙子は一つの決断を下した。

「父親がいない分、私は娘から誇りに思ってくれる母親でありたいの」

本来は夫婦で分担すべき子育てを、千沙子は一人で背負わなくてはならない。そうなれば、他の親より人一倍努力することでしか、一人前の親としての責を果たせない。

そのための最も有力な手段として、昇進の道を歩まなくてはならない——そう、千沙子は迷いのない意思を秘めた言葉で結んだ。

(あの尊いまでに綺麗な瞳に、一瞬で心が奪われてしまった)

これまで、その場の流れで付き合ってしまった元彼女達に抱いていた好意とは、まるで種類の異なる純然たる想い。心を甘く擦られる搔痒感と、心臓に火が灯されたような熱い昂揚が生じた瞬間を、寛人は一生忘れないだろう。

「宗田さん、よければアルバイトをしてみない？」

一通り千沙子が答えた後は、代わって寛人が質問攻めに遭う。主に大学生活の現状について話していたのだが、親の仕送りだけではギリギリなので、中々金銭的余裕が持てないと打ち明けたところ、ふと千沙子が思わぬ提案を持ちかけた。

「娘をそろそろ塾へ通わせようと思っていたのだけれど、まだ幼いし、私の帰宅時間が不安定で送り迎えが難しいの。だから——」

代わりに家庭教師を探している。それも、一人娘を預けられる信頼のおける人物を——と、千沙子は微笑んで注釈を入れた。

後日、樋口家に訪れた寛人は、まだ小学生だった真梨奈と出会い、以後大学を卒業するまでの間、家庭教師を務めることとなる。千沙子の期待に応えるためにも、熱心かつ楽しく覚えられるよう勉強を教えた結果、寛人は真梨奈からも大層懐かれた。

家庭教師を辞した後も真梨奈に誘われ定期的に樋口家へと足を運び、時には運転の

できない千沙子に代わり、休日にはドライバーを務めたりした。

そうした長年の繋がりを通して、寛人は樋口母子との信頼を深め、やがて千沙子と愛し合うようになった。

十年かけて成就した寛人の想いは、新たな家族を作ると言う人生における一つの節目に至ろうとしていた。

「パパ。行ってくるね」

樋口家の玄関先で二人を降ろし、車庫に愛車を入れてから玄関を開いた矢先、友人達と買い物に行く約束をしていた真梨奈と擦れ違いになる。事前に外出時のコーディネートを決めておいたのだろう。色彩のない喪服から鮮やかな私服に素早く着替えた女子大生は、薄手の白いハイネックセーター姿でくると後ろに向き直った。

ベージュのミニフレアスカートがふわりと広がり、喪服の時よりもデニールの少ない黒ストッキングに輝く美脚が、ふとももまで露わになる。

「ああ、行ってらっしゃい。何かあったら何時でも連絡するんだぞ」

家庭教師をしていた頃から変わらない、真梨奈と別れる際に交わす定例の約束。千

沙子が家におらず、一人で健気に留守番していた時には、ちよくちよくと寂しさを紛らわせるために電話をかけてきてくれたものだ。

「うん、それじゃ予算オーバーしたらパパに救難信号を送るね」

「それはまた、助けに行きたくなるレスキューだな」

もつとも、小さい頃は寂しがり屋だった少女も、すっかりしたたかに育っている。

渋面の寛人にクスリと微笑み、未来の義娘は掌を軽く振ってから出かけていった。

（とは言っても、実際に真梨奈ちゃんが俺を財布代わりにした時なんて無いんだが）

千沙子の躰と生来の気質もあってか、真梨奈は滅多に物をねだらない。如何にも小悪魔然とした振る舞いではあるが、その性根には母親譲りの潔白な芯が通っている。

千沙子もそれを理解しているため、軽く窘める程度で叱るケースは殆どない。

（あのちっちゃかった真梨奈ちゃんも、ついに女子大生か……そろそろ、彼氏の一人でも作ってくれると安心できるんだが……）

最初会った時はまだ小学生だった少女も、気付けば大人の仲間入りを果たそうとしている。義父と義娘の関係となる間柄だが、年の差が年だけに真梨奈は妹のようには見えない。

それだけに好きな男を見つけて、年相応の素敵な恋愛をして欲しいと願っているの

だが、生憎と真梨奈の理想像は高いらしく男の気配が微塵も見えない。

高望みのしすぎはよくないと思うものの、真梨奈自体が千沙子譲りの美貌を持ち、成績も極めて優秀という、才色兼備を地で行く女子大生なのだから何も言えなかった。

(でも、真梨奈ちゃんが彼氏にべた惚れして、俺なんか見向きもされなくなったら)

それはそれで酷く寂しいのだろうか――と、矛盾する思惑に寛人は小さく唸った。

「あれ、千沙子さん？」

最近では自宅よりも馴染んでしまった樋口家のリビングに足を踏み入れると、まだ喪服姿のままの千沙子が静かに煎茶を注いでいた。

「運転していて喉渴いたでしょう。着替える前にお茶を煎れておこうかな――って」疑問を言葉にする前に、視線と表情で言いたいことを先読みしたらしい。その優れた洞察力もさることながら、愛する美女のささやかな心配りが何よりも嬉しい。

何せ、千沙子に言われるまで喉が渴いていると自覚していなかったほどだ。本人以上に、千沙子が寛人を仔細に見てくれている様が、如実に伝わってくる。

これから妻になる美熟女との絆を感じ、温かな幸せが胸に込み上げてきた。

「お茶請け持つてくるから、少し待つていて」

急須から翠の湯滴を落とし終え、楚々とした仕草で千沙子が踵を返す。黒いストツ

キングに透けるふくらはぎが煌めき、漆黒のスカートから突き出るむっちりとしたふとももが、寛人の視界で艶めかしく躍った。

(この家には、俺と千沙子さんだけしかない)

リビングに残した美熟女の艶やかな香りが、寛人の鼻孔に染みこむ。途端、運転中に抑制されていた肉欲が奮起してきた。千沙子が残した甘い誘惑が、旺盛な陰囊を疼かせる。真梨奈がしばらくは戻って来ず、千沙子と二人きりになれた状況が背徳の衝動を後押しした。

茶箆筒を開け、菓子を選定している未亡人の後ろにそっと近付く。無防備過ぎる脇にするりと腕を伸ばし、背中から肢体を抱き寄せる。柔らかな肢体がびくりと震え「キヤツ」と、怜悧な熟女からは想像し難い可愛らしい悲鳴が奏でられた。

「も、もう、寛人君ったら。まだ喪服だからもう少し待つて……あつ、む――」

小首を振り返らせて自重を促す美女を、口付けで強引に黙らせる。リップクリームを湿らせただけでルージュを引いたように紅く濡れた唇が、敵かな喪服とアンバランスな調和を成し、背徳の官能を沸き立たせる。

漆黒のジャケットに掌を這わせ、布地の厚さに負けないよう力強く、それでいて熟れた乳房をゆつくりとブラごと掴む。ジャケットに深い谷が生じ、バストに密着して

いた薄手のワンピースがふわりと女の肌から剥離した。

「すみません。仕事が忙しくて、一週間近くも千沙子さんと会えなかったから、我慢ができなくなつて」

取り繕うことなく素直に言い訳はするものの、男の欲望は一時たりとも自制させない。どれだけ地味な服に隠匿されていても、愛する美熟女の弱点は把握している。この未亡人の熟乳は、大きさも感触も掌が覚え込むまで丹念に揉み込んだのだ。

片手でジャケットのボタンを外し、もう片方の掌でワンピース越しに柔房をブラジャーから溢れ出させる。ふんわりと熟れた乳肉がカップから零れたのを見計らい、黒いシルクを透かして乳首を摘まんのだ。

「あつ、ん……ダメよ。こんな格好のままするなんて……んんっ」

熟れた唇を啄むのを終え、ねっとり涎を纏わり付かせた舌肉を女の口内へと潜り込ませた。千沙子の抗議を無理矢理嚙下させ、三十八歳の甘い口肉を蹂躪する。快樂と至福の雷に打たれた未亡人が肢体を細かく痙攣させる。

見る人に怜悧な印象を抱かせる切れ長の瞳が脆弱に瞼を降ろし、色艶を帯びた睫があえかに囀った。愛する男だけにしか見せない、熟れた未亡人の弱々しい素顔。キャリアの道を邁進する才媛からは想像もつかない、儂いまでに切なげな女の貌。

愛娘にすらみせない男に媚びる牝の瞳が、寛人の逸物を力強く勃起させていく。

「千沙子さんも俺に会えなくて我慢していたんですよね。ほら、もう乳首がこんなに膨らんでくる。弄って貰いたいって、おねだりしてますよ」

「あつ、やつ……んっ。そんな嘘よ……ああっ」

寛人への自重は求めているが、寛人の淫らな追求を千沙子は拒まない。数日間キスをしなければ三十八歳の媚身が寂しさにいじけ、男の肉体を求めてしまうのは、もう口にしなくともわかる。

一方的な淫戯を明確に撥ね付けることもなければ、抱擁から逃げだそうとする素振りすらみせない。それどころか、拒絶の言葉とは裏腹に美熟女の口肉はいつの間にか寛人の舌を受け入れている。紅い唇で優しく舌肉を圧迫し、自分の舌をうねらせて淫猥に絡め取った。

「俺も会えないのが辛かった。オナニーも我慢して、仕事を頑張っていたんです」

「だ、だからって……あんっ」

獣の衝動は愛する女への耐えきれぬ想いがもたらしている——そう仄めかすと、僅かではあるが女の抵抗が緩んだ。充血した乳暈に、黒く染められたブラの繊維を擦りつける。なめらかな肌触りが鶉色の先端を擦り、美しき未亡人があえかに喉を鳴らす。

乳首を愛撫しながら時折指先に力を込めて圧迫してやると、黒ストッキングに彩られたふとももを震わせ、膝が笑った。

黒いジャケツトが女の撫で肩から滑り落ち、同色のワンピースが現れる。

理知的な年上の美女を、自分の淫戯で嬌声を爪弾かせる快感。男が女を肉悦で操る支配欲が、寛人にサディスティックな衝動を込み上げさせる。

「ちよつと愛撫しただけなのにもうこんな感じてる。千沙子さんも俺とセックスしたくて発情していたみたいですね。会えない間、オナニーしてたんですか」

首肯や否定をしなくても、周章に棚引いた睫を見ればその意味することは明らかだ。舌をゆっくりと引き抜くと、「あつ……」と名残惜しげに千沙子が吐息を零す。

紅唇に濡れた涎が、仄かに甘い香りを揮発させた。

「オナニー、していたんですね」

「お、覚えて無いわ……あ——」

曖昧な回答へ逃げつつ淫熱に浮かされたキスを求める千沙子だったが、寛人は無情にも顔を遠ざける。クールな美女が紅い唇を涎に濡らし、物欲しげに瞳を潤ませる様は牡の征服欲をこの上なく心地良く掻き立てた。

「思い出すまで、キスはお預けです」

「そんな酷い……あんっ、寛人君のイジワル」

女の幸せはキスを与えれば与えただけ充溢し、一方で女の肉悦が高まれば高まるほどキスを求めたがるとわかっていいる。それを熟知した上で、寛人は過敏に反応する未亡人の豊乳を刺激した。

黒ストッキングに包まれた細い足指が、甘い心地良さに小さく丸められる。

「あんっ。おっぱいばかり可愛がって……くう、んっ」

胸を弄りながら空いた片手でワンピースのファスナーを下ろしていく。興奮の抑制が体温にくべられたのだろう。三十八歳とは思えない若々しい肌理を敷いた背中には、薄らと汗が煌めいている。

（頭がじんわりと痺れる……千沙子のさんの匂い、なんて甘いんだ）

蠱惑を含有した甘い香りが、三十路を過ぎた女とは到底思えない、きめ細かな柔肌から発露する。若い恋人から愛戯を施されたくて堪らないらしく、発情した熟女は恥じらいながらも進んで肩をくねらせ、生肌の露出を増やしていった。

「んっ、ああっ。乳首、潰れちゃう……あんっ」

肩からワンピースが払われ、洋喪服に合わせられた漆黒のブラジャーが露わになる。既に片方のカップから零れ落ちていた熟乳を直に掌で掬い上げる。愛熱に温められた

柔らかな膨らみを軽く揉んで愉しんだ後、蕩け落ちそうなほど熟していた乳首を指の先端でキュッと躪り潰す。

女子大生の娘を持つ未亡人はいじらしいまでに儂げに、それでいて牡の情欲を舐め上げる艶やかな嬌声を奏でた。寛人の股間がぶるりと戦き、括約筋に押し上げられた我慢汁が圧迫された尿道の中で玉となつて迫り上がってくる。

「千沙子さん」

舌先をほんの僅かにでも伸ばせば、互いの唇に触れあえる距離。焦がれた女悦が口内を濡かせたのか、千沙子が大きく唾を呑んだ。

「独りで……したわ……んっ、チュツ……」

我慢の限界に達した美熟女は恥辱に頬を火照らせ、吐息混じりに自慰を告白する。約束通り、寛人が情愛を込めて紅唇を塞いでやると抑制された反動とばかりに、千沙子が狂おしく舌を絡めてくる。

（千沙子さんのトロつとして美味しい涎、いつまでも舐めていたい）

美熟女と共に情愛を貪りたいのを堪え、数秒と経たずに口内交合を切り上げる。男女の唇から涎の絆が切れると「ああ」と、悲鳴染みた吐息が紅唇から漏れた。

「独りで、何をしたのかきちんと言つて下さい」

「うう……イジワルだわ。寛人君、普段はあんなに優しいのに……んあっ」

ご馳走を途中で取り上げられた子供さながらに、麗しい艶女は恨めしげに寛人を睨む。もつとも、そんな虚勢も熟れた乳首を指先で優しく弾いてやるだけで、容易く霧散し、ねつとりと蜜を含んだ嬌声へと紛れてしまう。

「オナニーよ。寛人君とセックスできないから、オナニーしていたわ」

淫らな欲望が堰を切ってしまったからだろう。土砂が濁流によって削り取られていくように、千沙子は淫靡な秘密を吐露していく。

「いつからオナニーしていたんですか」

「あむ……んっ。三日前からよ。寛人君と会えないのが寂しくて切なくて……どうしても我慢できなくて……んふっ、チュツ……ああっ」

また一つご褒美とばかりにキスを解禁してやると、千沙子は伶俐な眦を至福に蕩けさせ、涎を溢れさせた舌を伸ばしてくる。白い喉が、艶めかしく蠢いた。

「千沙子さんはどうやって自分をいやらしく慰めていたんですか」

「んっ……最初はおっぱいを少しずつ愛撫して、濡れてきたらおまんこに指を入れて……グチュグチュって、出し入れて……ひうっ」

熟女の美味しい豊熟を揉み込みながら、片手でスカートから伸びる魅惑のふともも

に指を這わせる。黒ストッキングの光沢に輝く、艶やかな脚肌を掌でじつくりと味わった。指を昇降させるごとにむっちりとした脚肉が波を打ち、化粧が擦れるサラサラとした音が官能となつて男の鼓膜を妖しく擦る。

「クリトリスは弄らないんですか。千沙子さん、クリ責め好きでしょ」

脚線を遡行し、ふとももの付け根へと指先を流す。ワンピースのスカートがめくれ上がり、ストッキングよりも色濃い漆黒のショーツが露わとなった。服に合わせたらしくデザインそのものは飾り気が希薄で温和しめな薄布だが、フロントに添えられた心ばかりのレース模様が、大人のランジェリーとしてのプライドを示している。

「んっ…好き、よ…寛人君に弄られるの、大好き…あんっ」

熟女の呼気に荒い熱が混じった。鼠蹊においていた手を一気に女股へとすべり下ろした。パンテイストッキングのセンターシームに指を合わせ、ショーツに隠された姪莢を炙り立てる。淫らな未亡人は声ならぬ嬌声を喉の奥で爪弾き、悩ましげに膝を崩して男の掌を股座へと挟み込んだ。

「でも…オナニーではあんまり弄らないの」

しつとりと濡れた吐息を交え、千沙子は女股を弄る硬い手にそつと己の掌を被せる。「そうしないと…おまんこに指を挿れないと、寛人君のおちんぼで犯して貰ってい

る気分にならないもの」

淫悦に魔されたはしたない述懐。しかし、その内容はどのような誘惑よりも匂い立つ煽情を帯び、どんな色香よりも男の理性を狂わせた。

「んうっ。寛人君…チュツ、んっ…あふっ、んんっ」

溜まりに溜まった牡の情欲が、発作的に寛人を突き動かした。千沙子を翻弄した口付けを真つ向からぶつけ、紅い唇を激しく食る。舌肉を最奥まで挿入し、口腔をレイプするように蹂躪した。

熟房を転がしていた掌は猛々しい爪へと変貌し、柔らかな乳肉を傲慢に握り潰す。ショーツの中へと直に掌を潜り込ませると、既に愛蜜を滴らせていた女裂が指先をねつとりと濡らした。はしたない熱汁が揮発し、絡みつく牝の淫臭が厳粛な喪服に身を包んだ未亡人を燻していく。

「もつとして寛人君…あんっ。もつと私を求めて欲しいのっ」

年下の彼氏の膨満した牡欲に、三十八歳のキャリアウーマンは即座に感応し、猥染みたキスを食る。男と女の舌が卑猥で淫らにのたうち、涎の飛沫が時折弾き出された。寛人が愛蜜の漏れた牝穴に中指をずいゆりと潜り込ませると、挿入を手助けするようにショーツ越しに千沙子が掌を押しつけてくる。淫らなぬめりにふやけた蜜路は、



寛人の指を難無く根元まで呑み込んだ。

色に酔った熟女の期待に応えるべく、寛人もまたズボンの中で勇ましく勃起した逸物を三十八歳の媚臀へと擦りつけ、淫猥なる交尾を求めぬ。

「寛人君……ああっ、もつとキスして……もつと、触って……ああんっ」

男が女を求め、女もまた男を求める。

唇が密着したまま舌肉が複雑に結ばれ、身体の全てが互いを求め合っていた。千沙子は寛人の若く逞しい身体を欲し、寛人もまた千沙子の豊熟した媚体を手繰り寄せる。絡まり合った身体が不規則に揺れ、もつれた足が踏鞴を踏む。男女の位置は何度も入れ替わり、春陽に切り出された影がキツチンの床で躍った。

男女の肌に微細な汗が浮かび上がり、卑猥で淫蕩な靄が立ち籠める。勢い余った身体が食器棚に接触し、収納されていた食器が耳障りな音と共にスライドした。

「千沙子さん……最後に教えてください」

システムキツチンの端に据え付けられたウッドテーブルに、熟れた婚約者の上体を腹ばいにして投げ出させる。革が焦げかねない勢いでベルトを引き抜き、ジッパーを内側から破ろうとしていた怒張を開放した。密かな自慢でもある太く長大な牡根が、ブンツと勇ましく宙を切り上げる。鈴口からあふれ出していた淡精が跳ねる。愛欲の赴

くまま抱擁する最中に剥き出しとなった女の背へ、卑猥な涎がねつとりと張り付いた。「オナニーしている時は、どんな犯られ方を想像していたんですか」

女の崩れたふとももへと指を伸ばし、掴んだスカートを一気に腰まで捲り上げる。熟脂の乗った艶脚が全貌を現し、ふとももの最奥に張られたパンティストッキングのランガードが暴き立てられる。

パンティストッキングに透けたフルヒップショーツでも抱え込みきれない、三十八歳の豊熟した媚臀が突き出された。女子大生の娘がいるようには見えない未亡人のヒップラインは、経産婦らしからぬ理想の輪郭を維持している。

（男を牡に変える、魔性の尻だ……ああ、唾が湧いてくる）

なめらかさに富んだ臀肌が、ぷるんと弾んだ。牡の情欲を焚き付ける熟尻が、目頭に蒼い焰を灯す。股間に渦巻く劣情が止めどなく淡精を噴き上げさせ、鈴肉が息苦しく痙攣を起こす度に、ぼたりぼたりとキツチンの床に裏筋から透明な糸が引かれた。

「オナニーしてる……時は……」

蠱惑に蒸された美女の声が、途中で途切れる。もどかしいまでの沈黙が、寛人をむず痒い焦燥感に駆り立てた。牡の本能が赴くままにペニスをぶち込みたい衝動に駆られたが、拳が震えるほど強く握り締め辛うじて耐え凌ぐ。肺に沈んだ邪な熱を、飢え

た狼の如く口から吐き出す。気道が焼き付き、喉が焦げるような痛みを襲われた。

(後ろからちんぼハメて、狂ったように腰を振りたくりたい……ああ、千沙子さんを犯したくて、頭がおかしくなりそうだ)

顎が軋む寸前まで奥歯を噛み締め獣の衝動を押し殺していると、千沙子が潤んだ瞳を横に流した。

「……バックから寛人君の硬くて大きいおちんぼを、思い切り突っ込まれる——って、妄想をしていたわ」

男の胸中で渦巻く黒い業火に気付いたのか。寛人を顧みる美女が、微かに紅い唇を微笑ませた気がした。寛人の欲望を丸ごと具現化した願いが、獣欲の衝動を開放する。

「ああっ。ひ、寛人君……キヤッ」

荒ぶる性欲が、考える暇を与えずに寛人の指先を伸ばした。パンティストッキングを脱がすこと無く、股座の中央を走るセンターシームを摘まみ上げ、一抹の躊躇も含まず全力で左右に引き伸ばす。黒い艶糸がビリッと耳障りな音を立てて引き裂かれ、ショーツのクロッチが手順を無視して晒された。

「乱暴だわ、ストッキング破るなんて……あんっ」

こんなレイプ染みた展開を半ば望んでいたのだろう。色を孕んだ千沙子の声に非難

は含まれておらず、寧ろ恍惚を彷彿とさせる粘つく熱を帯びている。

もつとも、獣欲に急ぎ立てられていた寛人は、もう千沙子に斟酌する余裕すら忘れていた。一刻も早く卑柱と媚壺の結合を求めて、手荒くクロッチを横に除ける。愛蜜に濡らされた薄布が媚臀を大きく陥没させ、美しいヒップラインが淫靡に崩れた。

(このエロい匂い……ああ、嗅いでるだけでザーメンが噴きこぼれそうだ)

肛孔と共に姿を現した牝裂からは、未亡人の発情を示す淫汗が糸を引く。牝の理性を腐食させる、濃密な牝の性臭がむわりと沸き立ち、平衡感覚が揺らいだ。

膝を落としてから抉るように腰を突き出すと、湿潤にほぐれた牝孔に鈴肉の先端がずいゆりと呑み込まれ、千沙子が「あんっ」く鳴いた。

「んっ、うう、おちんちん、挿って……ああっ」

パンティストッキングのウエストテープを両手で掴み、女体をがっちり拘束した直後、溜まりに溜まった情欲を怒張に注ぎ、三十八歳の蜜路にずつぷりと嵌め込んだ。牝悦にぬめる膣襞は何ら抵抗なく肉の凶槍を素通りさせ、蜜壺の最奥まで受け入れる。熟れた女体が悲鳴染みた嬌声と共に跳ね上がった。勢い余った陰囊がぶるんと振り子のように揺れ、黒く彩られたふとももに叩き付けられる。

「はあ……はあ……寛人、君……」

己の妄想を体現して貰った喜びは、望外の快絶を女体に溢れ返らせたらしい。たった一度の突き込みで三十八歳の肢体はエクスタシーの痺れに苛まれ、不規則な痙攣を起こしていた。それが男に媚びる演技でないことは、螺旋を描きながら剛根へみっちり絡みつき、淫らな収縮を引き起こした女穴が何よりも雄弁に物語っている。

(もう何度もセックスしているのに、千沙子さんのエロさは全然色褪せない)

内々とはいえ、婚約を取り付けるまで幾度と無くこの艶やかに熟れた身体を貪ったが、発露するエロティシズムは何年経っても翳りを見せない。

ウッドテーブルに載せられた上体はエクスタシーによって妖美に脱力し、光沢ある爪が力なく立てられる。理知の双眸は悦美の虚ろに吞まれ、半開きとなった紅唇からはだらしなく涎が垂れていた。

寛人の厳ついペニスにより、串刺しとなった臀肉が快感にうねる。むっちりと伸びた媚脚は女体を支える役目を放棄し、媚瞳がアクメの収縮を起こすたびにふくらはぎをひくつかせる。

(こんな綺麗でいい女が、ようやく俺の妻になるんだ)

初めは、デートに漕ぎ着けるのすら難渋した。年の差や未亡人であることを理由に軽くいなされ、そのたびに苦心して次の誘い文句を考えた。熱烈な恋心が挫折と挑戦

を繰り返させ、自分の想いの丈を少しずつ千沙子に伝えていった。

年の差、未亡人、子持ち——千沙子に再婚を躊躇させる不安材料を一つ一つ丁寧に取り除き、男としての信頼を勝ち取っていった。

その成果として、三十八歳の美熟女は二十八歳の青年にこの極上の身体を捧げ、新しい夫となる男の生ペニスを女股で呑み込んでくれる。

愛する女を犯せる悦びが、寛人の腹に牡としての充溢を漲らせ、肉竿に巻き付く無骨な血管に激しい情欲を流し込んだ。

「あっ、んっ。おちんちん動い……んんっ」

千沙子の媚体から絶頂の波が引いたところを見計らい、逞しいピストンを始める。豊臀とは相反する鋭く括れた艶腰をがっしりと掴む。贅肉は無くとも蕩ける艶脂がふんだんに湛えた熟女の肌は、男の硬い指を深く沈み込ませた。

「は、あ……いつもより太くて、ガチガチになって……んっ、ああんっ」

雁を張り出した豪幹を突き出し、愛蜜塗れとなった女褻をずぶりと掻き回す。青年の瑞々しく雄々しい交合に応じて、熟女の色穴も喜悅の歓待でもてなしてくれる。

竿肉をみっちり包み込んだ媚筒は牝の本能の赴くまま絶妙な緩急を付け、牡柱の根元から搾りあげた。リズムカルに淫らな抽送を行っていると、不意に陰囊から灼熱

感が迫り上がってくる。寛人は慌てて括約筋を締め、射精の暴発を防いだ。

（一週間近くセックスしてなかったから、油断したら一瞬で射精するな……どのみち長くは我慢できないだろうが、ギリギリまで踏ん張ってやる）

長い時間をかけて未亡人の身体を己の獣柱で蹂躪し、寛人専用の蜜穴へと変化させてきた。寛人が千沙子の犯し方を熟知しているように、千沙子もまた寛人を淫らに慰撫する術を女体が心得てしまっている。

いつもだったら猛然と腰を振りたてて未亡人の女股を賞翫するところだが、そんな真似をすれば即座に射精コントロールが崩壊し、惨めな暴発を迎えてしまうだろう。

「ああつ、やあつ。ダメよ、これ……あんつ。感じ過ぎちやうつ」

ペニスに注ぎ込まれる快感を抑制しつつ、媚筒にずつぷりと牡の分身を嵌め込むと、そこから更に蜜肉の最奥を押し上げる。鈴肉の先端を小刻みに突き上げ、膣肉越しに子宮を揺さぶってやると、千沙子の艶やかな悲鳴が一際色を帯びる。

（調教には時間がかかったけれど、ようやく子宮で感じてくれるようになったな）

亡夫のペニスと比べて、寛人の怒張が著しく長大だったらしく、初めの頃は根元まで呑み込むこともままならなかった。繰り返される性交を通して膣壁を慣らし、己の逸物を残らず嵌め込ませ、未亡人の淫肉を新しい男に相応しいものに作り替えていく。

子宮口を騷ってポルチオの快楽を湧出させられるようになったのはつい最近であり、それだけに千沙子は新鮮な性戯が生み出す悦楽の奔流から逃れられない。

「せっかく子宮から気持ち良くなれるようになったんです。ほら、千沙子さんの大好きな年下のデカチンで、もつと沢山グリグリってあげますよ」

「もう、わざといやらしい言い方して……あんつ、んうつ」

膝を伸ばし、背が弓なりになるほど高く精樹を突き上げた後、そのまま腰だけを前後左右へと掻き回してやる。不自然なまでに拡張された牝穴に空気が入り込み、グブグブと排泄を彷彿とさせる下品ではしたくない音が清潔なキッチンに響いた。

「やあつ、んつ。恥ずかしいっ。ああつ、許してっ。ひいんつ」

羞恥に苛まれた千沙子はウツドテールに突っ伏して顔を隠すが、挟り込まれる快楽は未亡人の心境などお構いなく蹂躪する。天板に伸ばされていた繊維指が握り込まれ、うなじに微細な汗が滲んだ。

追い立てられるようにして黒艶に彩られたふとももが痙攣を繰り返し、化粧に透かされた踵が狂おしい快楽から逃れようと何度も跳ね上げられる。

（年上の女を……しかも、未亡人をちんぽに服従させるのは、最高に興奮する）

美しい蝶を虫ピンで縫い止めるように、己の股間から生えた肉槍で熟れた美女の艶

穴を支配する快感。亡夫ではなく、自分こそがこの美熟女の新しい主人だという確かな実感が、寛人の支配欲を充溢させ奮起した睾丸を粗暴な恍惚に酔わせる。

後背位で犯していると女が一方的に男の卑腰を叩き付けられるだけとなるので、余計に牡の嗜虐心が刺激された。

「恥ずかしがっているわりに、まんこは熱心にちんぼをしゃぶって来てますよ。千沙子さん、嘘を吐くのは駄目です」

「あんっ。おまんこの奥で感じるようにしたのは寛人君なのに……うぐっ。嘘吐き呼ばわりなんて……あっ、やめっ……んんっ、くうんっ」

非難の声を上げる千沙子だが、そのすべてが粘るほどの甘蜜に塗れた艶声となっているため、セックスを盛り上げる淫蕩なスパイスにしかならない。寧ろ、無力で無為な三十八歳の抵抗は、男の征服欲を煽り立てる下種な拍車にしかならなかった。

「ちんぼで子宮突かれて悦べるのは、千沙子さんに淫らな素質があったからですよ。ふふふ、自分の淫らさを棚にあげるなんて、千沙子さんは悪い妻になりそうだ」

「あんっ、違っ……んんっ、ああっ」

腰を回して深くじつくりと悦美を与える動きから一転し、激しいピストンで獣の挿抜を再開する。女の股肉は寛人の執拗な淫戯によってすっかり蹂されておろ、精力漲

る怒張の突き込みを注がれ、悦美の塊を吐き出した。

三十八歳の媚臀を二十八歳の下腹で張り、パンツパンツとはしたくない交合音を弾かせる。黒ストッキングに彩られた尻肉がたわみ、熟れた臀肌が淫らに煌めいた。

卑肉と媚肉がぶつかる淫猥なリズムに合わせ、悲鳴染みだ嬌声が奏でられた。  
(もつとこのエロ穴をハメ抜きたいけど、そろそろ限界だ)

本音を言えばじつくりと千沙子を蕩かし、長い時間に渡って美味しい女体を味わっていたいが、禁欲生活を強いられた反動で辛抱ができない。

寛人の願望とは裏腹に、陰囊で放つこと無く蓄えられた一週間分の子胤はぐらぐらと煮立っており、何時決壊してもおかしくなかった。

(性欲そのものはまったく衰える気配がないんだ。一発目を景気づけに出した後、二回目からはベッドに移動して、じつくりと千沙子さんを可愛がればいい)

幸い、ペニスを締め上げる膣肉の反応を見るに、千沙子も再び強烈なアクメに達しそうな気配だ。どうせなら射精と同時に女をエクスタシーに追い立て、至福の合一感を得たい。愛する女と性器が蕩け落ちる法悦を共有すべく、寛人は射精に向けて猛然と腰を振りたたてた。

「ああっ、ダメッ。イクッ。また寛人君のおちんちんでイカされちゃうっ」

意識が飛ぶ絶頂に近付いていると、甘い経験の数々からわかっているのだろう。熟れた身体が緊縮し、柔らかな四肢が強張っていく。

「俺もそろそろイキますよ。エクスタシーを味わいながら、年下婚約者の子胤汁をしっかり搾り取ってください。それっ」

ラストスパートを駆け抜けるべく、射精を目前にして張り詰めた卑柱を苛烈に浴びせかける。汗ばんだ腹筋が浮き出すと、男根にぶら下がっていた陰嚢がずんぐりと丸まり、子胤の撃ち出しに備えられた。

「早くっ、あんっ。早くイッてっ。おまんこに早くっ……ううっ、んんっ」

先に絶頂に達するなど、暗に言い含めたためだろう。快感の渦に溺れながらも、千沙子は必死になって射精を請う。年上女の一途過ぎる忍耐が、絶頂に至る興奮に更なる発破をかけた。

「出すよ、千沙子さん。このエロ穴に、一週間溜めた濃厚なザーメンを出しますよ」セックスの頻度が上がるにつれて、千沙子は自分から進んで避妊薬を用いていた。その甲斐あって、コンドームを使わず膈内射精の高揚に耽溺できる。

千沙子の淫らな献身のためにも、自分が与えられる最高の快楽をこの身体に注ぎ込まなくてはならない。抽送のたびに肉悦に弾む媚臀を鎮めるべく、女腰に回されてい

た両手を離し、押し込むようにして尻肉を挿んだ。己の体重を両腕にかけて色に狂う女体を押さえ込むと、左右にぶれる媚瞳が強引に静止させられる。

下腹に固定された子宮を膨れ上がった鈴肉でとどめとばかりに突き抜いてやると、むつちりと艶に輝く媚脚が気の違ったように跳ね回った。履いていたスリッパが床を搔きながら後方へと蹴り飛ばされ、露出した足先が床に爪を立てる。

「もうダメッ。飛んじやうっ。あっ、あっ、んんっ」

もつとも、フローリングの床は毎日きつちりとクリーニングされ、あまつさえ摩擦の少ないストッキングで覆われた足指は、まったく踏ん張りがきかせられない。未亡人の黒脚は悲壮なまでに足搔くだけに終わり、化繊の色艶だけが散乱して脚肌の色気を撒き散らす。

そんな無力さすら快悦に乱され自覚できない女の嬌態が、男の劣情を最高潮にまで昂ぶらせた。

「ああっ、出すよ。搾って、千沙子さん。俺の子胤、エロまんこで搾りあげてっ」

ぬめりの蜜壁に包まれているのに、発火せんばかりの灼熱感が寛人の欲樹を苛む。

陰嚢の皺肌、編み目となった血管が這い回った。獣熱で沸騰させられた子胤が、浅黒い子胤袋をぶるぶると痙攣させる。

「出してっ。千沙子のおまんこに、寛人君の精子をいっぱい注ぎ込んでっ」

無闇にばたつかせられていた熟脚が、最愛の男を求めて寛人の足を抱き込んだ。緊張に舐まれていてもなお官能の柔らかさを失わない脚肉の感触が、射精に至る引き金を引いた。

(来るっ)

締め上げられた陰囊から、熱い逆りが漏出した。卑熱の塊が輸精管を一瞬で駆け抜け、焦げ付くような悦媚が寛人の呼吸を止めた。尿道の奥底で急激に蓄えられていく精液が前立腺を圧迫し、牝のエクスタシーを膨張させていく。肥大しきった精液溜まりが出口を求めて一気に上昇し、尿道を爛れさせながら射精口へと殺到した。

「ああっ。イクッ。千沙子、イツちやううっ」

未亡人がエクスタシーへと吞まれ、牝の生殖本能がペニスを根元から搾りあげる。

「おおっ、出るっ」

射精路を上昇していく子胤と媚瞳の淫らな吸引がリンクし、鈴肉が破裂するような放精が生じた。あまりにも濃厚で、糊のような粘りを含んだ子胤汁が、ドボツと重々しく膣内に落とされていく。

待ち望んだ射精に相応しい壮絶なまでの快楽が脳裏を席卷する。視界からは輪郭が

崩れ、耳からは音が剥奪された。

意識を吞まれかけた寛人は慌てて上体を倒し、千沙子を覆うような格好のままウツドテールに両手を着き、深く熱い吐息を肺の中から吐き出した。

(千沙子さんに出しすると、最高の幸せを感じる)

美熟女の膣内に己の子胤を放出し、エリートの子女を汚辱していく悦び。膣に射精を繰り返すごとにこの未亡人が自分の女として染め直されていく快感は、牝の野蛮な独占欲を著しく刺激してくれる。

「あっ……ん……」

一滴残らず子胤を搾りきり、ゆっくりとペニスを引き抜いていく。牝悦に混濁した双眸で荒い口呼吸を繰り返していた千沙子が、気怠い嬌声を漏らす。鰓の張った雁首が愛蜜を垂らし、射精を終えて湯気を纏わせたペニスがぬるんと抜けた。

(こののだらしなく開いたまんこが、堪らなくエロい)

熟女の蜜穴は寛人の巨根を咥え込んでいたので中々閉じられなかったが、よほど精液が濃かったらしく逆流する気配がない。そのくせ、一滴の子胤すら滴らないのに、ぼっかり開いた熟女の生殖穴からは、強烈な精臭が湯気を混じらせ撒き散らされる。

(セックスできないのは辛かったけれど、溜めていた甲斐はあった)

濃厚な子胤を熟女に吐き出せた満足が、寛人に充溢した達成感を与えた。肉欲に負けて自慰行為に耽ってしまったら、ここまで青臭い匂いを放つ濃胤を射精することはできなかっただろう。

(それに、一発出したばかりなのに、もう次の射精をしたくなってくる)

元より寛人の性欲は旺盛だ。一度セックスを始めれば二回、三回と連戦できるが、それでも一度射精すればある程度の脱力感に蝕まれ、インターバルを必要とする。

ところが、性欲が溜まりに溜まっていた影響らしく、射精したばかりだといふのにまったく勃起は衰えない。ペニスの火照りを冷ますことなく次の射精をさせると、卑熱の詰まった陰囊が男の股間を疼かせた。

(どうせベッドに行ったら全裸になるんだ。もう一回だけ喪服を着た千沙子さんとエッチしよう)

次は身体の向きを変えて正面から犯そう——寛人は途切れのない性衝動の赴くまま、力の抜けきった女体をウッドテーブルに転がした。

「ま、待って……寛人君……」

眼下に秘口を捉え、竿肉を握って亀頭を挿入させようとした刹那、白い緞手が媚裂を覆い隠した。

「ええと……ひよつとして、もう限界……ですか」

嫌な予感がしつつも微かな希望を抱き、愛する熟女を見つめる。エクスタシーの余韻がまだ靄となって双眸を曇らせていた未亡人は、寛人の声色に悄然としたものを感じたのだろう。「ええ」と、息を乱しながら申し訳なさげに項垂れる。

「ごめんなさい……寛人君」

「いや、気にしないでください。無理をさせちゃ元も子もないですから」

我が身の至らなさを悔やむ未亡人を、寛人は爽やかに微笑んで慰める。だが、千沙子を庇う一方、無念でならないと苦渋してしまうのも、また本心であった。

(千沙子さんは、凡そ欠点らしい所がない人なんだけれど——)

女優顔負けの美貌を誇りモデルも羨む肢体を持つ、出世街道を邁進中のキャリアウーマン。樋口家の家計を盤石に支え、家事もそつなくこなせる万能ともいえる賢母。

一人の女としても頗る有能であり、甘く熟れた身体でしっかり男をもてなしてくれる。男が責め立てればそれに応じて嬌声を紡ぎ、官能の肢体で情欲を惑わせてくれた。(ただ……セックスの継続力だけが全然無いんだよな……)

何処を切り取っても完璧にしか映らない千沙子だが、セックスだけは長く続けられない。性感が豊かな故に悦楽を感じ過ぎてしまい、必要以上に疲労している節があ



る。セックスする頻度が上がり、女体の調教が進み、熟女の身体は色に磨かれる反面、性器を交わせる時間が着実に短くなっていた。

（未亡人だった千沙子さんが順調に俺の女になっていつているんだから、本来は喜ばなくちゃいけないはずなんだけれど）

女が自分の色に染められて行けば行くほど官能の負荷に弱くなっていくのは、二律背反の煩悶を寛人の胸中に渦巻かせる。

「千沙子さん。愛してます」

「私もよ、寛人君……ん……」

千沙子の不安を払拭すべく、寛人は優しく火照った女体を抱きしめた。時間差で牝穴から漏れ出てきた精液が、どろりと塊のまま股座から落ちる。

三十八歳の柔らかな肢体に耽溺する一方で行き場を無くした卑熟を抱え、二十八歳の巨根はもの悲しく天に吼え続けていた。

## 二章 義娘の甘い脅迫

ネットの通信環境が飛躍の一端を辿り、全盛期と比べれば幾分勢いを削がれたレンタルビデオショップだが、視認性の高さもあってかまだまだ店舗に足を運ぶ人は多い。そんな店内の一面に仕切られたある領域。邪な欲望で染められた黒地に、禍々しいまでに緋色の文字で「R18」と認められた暖簾が垂れ下がる、成人男性の聖域。

千を超えるタイトルが混然と並び、万を超す淫らな被写体がパッケージされたアダルトコーナーの片隅で、寛人は深い溜息を虚しさと共に吐き出した。

（結局、あの後は千沙子さんと一回しかセックスできなかった）

最低でも五回は精を吐き出し、存分に千沙子と共に肉欲を貪ろうとしていただけに、たった二回しか身体を許して貰えなかったのは消化不良も甚だしい。千沙子に心底惚

れている手前、己の劣情を優先させることはできないし、文句も言えない。

そうかといって、目一杯に二十八歳の情欲を浴びせ、愛熱と色情を注ぎ込んで未亡人を愛悦に狂わせたかったのも事実だ。

（なんとか自分の我が儘を堪えたのはいいんだが……こんなに悶々としていたんじゃないかどうかも怪しい）

愛する女の意思は尊重しなくてはならない。その一方で、不完全燃焼に陥ったあげく未だ火種の燻る牡の劣情は、勃起が収まっても男の股座をチリチリと焦げ付かせてくる。度し難い情動を鎮めるために洩々向かったのが、この欲望が渦巻くアダルトコーナーだった。

（婚約前まではオカズくらい持っていたんだけど）

寛人もお気に入りのアダルトビデオくらいは所持していたのだが、千沙子とセックスし始めてから徐々に用いなくなってきた。結婚をしてからは千沙子は当然として真梨奈とも同居する予定なので、婚約を機にすべて処分してしまったている。

（ネットで視聴するにしても、どうにもセキュリティに不安があるからな）

アダルト系のサイトから、しばし情報流出を陳謝する戦慄すべきニュースが流れるご時世だ。あの手のサイトはクレジットカードが主な支払い方法なので、万が一にも

漏洩したら洒落にならない。そうした理由もあって、現金払いが標準化しており、かつ学生の頃から利用していた馴染みのある店でアダルトビデオを借りることにした。

（オカズ探しには期待と興奮がつきものだったのに、今はもの悲しいだけだ）

なまじ、千沙子が牡の欲望を最高に満足させてくれる相手だと判っているだけに、どんなエロティックなパッケージも所詮は代用品にしかならない。しかも、せっかく愛する婚約者のために蓄えた精子を、あの艶美な身体に塗りたくることもできなければ媚腔が膨れ上がるほど注げもしない。

ただ、獣の衝動を鎮めるために余剰な精液を己の手淫で吐き捨てるだけだ。これだけ気分を高揚させるといのが、土台無理な話だった。

（……っと、こつから先は止めておこう）

適当に物色していた寛人だが「熟女」とラベリングされていたコーナーに差し掛かったところで足を止める。三十八歳の婚約者を抱けず代わりにビデオの中にいる熟女に欲情するのは、何やら酷く冒瀆的な気がした。

（それに、俺は熟女じゃないと勃たないわけじゃないし）

結婚相手が自分よりも十歳年上だったので、あらゆる知り合いに誤解されがちだが、寛人は年上好きというわけではない。入れ込んでしまった女が偶々年上だっただけで、

ある一定の年齢層でないと欲情しないという性癖を抱え込んでいる人種ではなかった。寧ろ、千沙子と会う前に付き合っていた数人の彼女は、すべて自分と同年齢か年下であり、性的趣向の幅はノーマルの範疇を出ない。

(どうせだから、思いつき若い子の出ている作品を選ぶか)

自慰に耽っている時に未来の妻を思い出さないよう、なるべく共通点の無さそうなパッケージを手を取っていく。千沙子との思い出は彼女が三十歳の頃から続いているため、それ以下の若い女が出ている物を目安にしていく。

熟女系は当然スルーするとして、出会った頃など千沙子は二十代半ばにしか見えなかったもので、如何にもその年代が多い人妻系や職業系のジャンルも除外していく。

(狙って選んだわけじゃないが……女子高生モノばかりだ)

ある程度数を選んだところで、何重ものフィルターを通り抜けた作品を見返してみると、手元にあるのはセーラー服やブレザーを着た美少女達ばかりの物となっている。貸し出しカウンターにいる店員が、バーコードを読み取りながら三十路間近の寛人に如何なる印象を抱くだろうかと懸念するも、すぐに馬鹿馬鹿しいと頭を振る。

(コンピニのエロ雑誌に鼻息を荒くする中学生じゃないんだ。この年になって、そんなくだらない心配する必要がどこにある)

社会人生活も長くなり、相応の世間体なるものを把握できる年頃になってきたせいだろう。久し振りにアダルトビデオを借りるのに、どうにも変な緊張感が付きまとう。

こちらは真つ当な支払いをする客なのだから、店員の顔色を見る必要などない——そう思い直し、黒い暖簾を払って外に出る。

「え——」

借りる物は決め、さっさと会計を済ませるべく足を速めた寛人はしかし、その一歩目から急停止を余儀なくされた。勢いを殺し切れなかった上体がぶれ、伸ばされた腕が宙に縫い止められる。突然の停止は四肢の末端まで力を伝えきれず、掴んでいたディスプレイケースが水を切るようにして投げ出された。

双眸の見開かれた寛人の瞳に、ゆっくりとアダルトビデオを拾う白い繊細な指先が映し出される。

半透明のケースを拾った少女は、八年間の間に一度も見せたことのない侮蔑に眉を歪め、義父となる男を穢らしげに睥睨していた。

自宅のリビングほど寛げる空間はこの世に存在しない。圧迫感を与えない広々とし

た室内は、窮屈な煩わしさから開放感をもたらし、柔らかなソファは強張った足を休ませ、極上のリラックスを与えてくれる。初任給で奮発した高級スピーカーは実家で使っていた安物とは次元の異なる音を奏で、音楽の彩りを深めて耳を愉しませてくれる。

大型のテレビも壁に掛けられているため、スピーカーと合わされるとその臨場感たるやなかなかの物だ。千沙子などは他の観客で気が散ることもないためか「映画館より良いわ」と、大層この環境を気に入っており、見たい映画があると時折ここに持ち込んでくるほどだ。

勿論、隣で見ている寛人はその後は決まって愛する美熟女の肩を抱き、やがてどれほど高価なスピーカーであろうとも決して出せない、艶やかな嬌声を奏でさせる。

「あのレンタルショップでバイトしている友達の顔を見に行ったら、まさかこんな物を借りているパパを見つけるなんて、思わなかった」

憩いの場であり、娯楽の場であり、男女の愛を語らう場——そんなリビングが、今や針の筵むしると化していた。息苦しいまでに重い雰囲気は肺にのし掛かり、棘となった空気が寛人の肌を無遠慮に刺す。

バンツ——と、目の前に据え付けられたガラステーブルにディスクケースが叩き付

けられる。既に著しいプレッシャーをかけられていた寛人のメンタルは、二十八歳の成人男性とは思えないまでに萎縮していた。クッションに沈んでいた尻が半強制的に飛びはね、胃が痙攣するようにして持ち上げられる。

寛人が借りてきた——より正確にいえば、真梨奈に見咎められた後、棚に戻すことを許されなかったアダルトビデオの数々がテーブルに散乱する。媚態を露わにした女の煽情的なラベルがケースから透けていた。

「パパがこんな物借りてるなんて、本当にかっかり」

テーブルの対面に立ち、肩幅に脚を開いて仁王立ちとなっている真梨奈は、心底落胆したとばかりに嘆息する。真梨奈には小さい頃から懐かれ、本当の家族のように慕われていただけに、暗い怒りの込められた言葉が胸に刺さる。

「その……真梨奈ちゃん。これは——」

「まだ私が話してるんだけど」

胸の前で腕を組んだ女子大生が、冷やかな一瞥で言い訳を打ち切る。蛇に睨まれた蛙宛らに、寛人の背中にべったりとした脂汗が噴き出した。

（下手なことと言えない……真梨奈ちゃん、完全にブチ切れてる）

千沙子と共に長い付き合いを続けてきた少女だ。楽しい思い出ばかりだが、彼女が

ふて腐れたり怒ったりしたこと少なからずある。それでも、十代の女子が反目してきた理由というのは、大人である寛人にとってはどれも可愛らしいものだった。

それら大半は未熟な少女の身から出た錆であることもあってか、大人がちゃんと宥めれば仲直りにスムーズに応じてくれたものだ。

しかし、今回の怒りは起因と質が根本的に違う。己に些かの非も無く、また、敬愛していた義父が腹の底では下衆な劣情を抱えていたという現実を直視させられ、家族としての信愛が反転して憤怒へと変わっている。

下手に触れたら、それこそ刺し殺されても不思議では無い。

「私は女だからわからないけれど、男って定期的に射精しないとダメなんでしょ？だから、パパがこういうのを見るのは、必要悪として認めてあげる」

認める——と言いながらも、真梨奈の語気は些かも緩んだ気配がない。母親譲りの美しくも鋭い双眸が細められ、寒くもないのに睾丸が震えた。

「けれど、ママとエッチしないで、こんな物借りるなんてどういうつもりなの。三十八才の女は妻にできても、エッチの相手をする気にならないってわけ？」

ゆらりと真梨奈の上半が屈んだ刹那、肩から打ち下ろすようにしてテーブルに掌が叩き付けられる。強化ガラスの天板が凄まじい音を立て、アダルトディスクの収めら

れたケースが宙に跳ねた。

「ち、違うっ。誤解だ、真梨奈ちゃん」

高圧的な示威行動を隠そうともしない真梨奈だったが、血の気を引かせた寛人が心底慌てたのは発言であって行為ではない。

（真梨奈ちゃん、俺が千沙子さんを女として欲情できないと勘違いしている）

選んだオカズの大半が女子校生モノであり、そのすべてが若さを強調したエロティシズムを売りに行っていたためだろう。どうやら真梨奈は、事実上の夫婦であるにもかかわらず、寛人が夫としての役目を放棄しているように映ったらしい。

愛情を表す最高の形がセックスなら、それを千沙子にすべて注ぐべきであり、こんな淫らな娯楽で発散させるのは断固として許せないのだろう。付け加えるなら、真梨奈は千沙子を心から尊敬しており、世界で一番綺麗な母親であると自負している。

それだけに、母とは比較にならない低レベルな容姿の女に寛人が浮気するのが納得いかないのだ。

真梨奈の怒りは至極真つ当であり、寛人自身も当然の反応であると思う。

「誤解？ それじゃ、コレをどう説明してくれるの？」

「うっ——そ、それは……」

しかし、だからといって安易に真相を——それも、義理の娘となる十八歳の女子大生に、千沙子とのセックスライフを白状するわけにもいかない。

真梨奈は気難しい思春期真っ只中の少女ではないにしろ、まだ未成年の女子大生だ。母とその婚約者がセックスをしているのは頭では理解していても、いざ本人が生々しいセックスの実情を話し始めたら暗澹たる気分になるだろう。

否、未成年は関係無い。寛人として、両親の性事情など札束をうずたかく積まれても聞きたくない。

(こんなことを話したら、絶対真梨奈ちゃんから蔑視される)

自分の性欲が旺盛すぎて、千沙子がセックスについて来れない——等と、馬鹿正直に吐露できるわけがない。誤解を解くためには詳細な説明が必要だろうし、そうなるどセックスの内情を仔細にさらけ出さなくてはならない。そんなものは羞恥の極みだし、千沙子も交えているだけに寛人個人の判断で話していいものではないだろう。

(おまけに真梨奈ちゃんは女だ。男の度し難い衝動は、理解できないだろう)

アダルトビデオを必要悪と断じた少女だ。表層は理解できたつもりでも、心から納得するのは難しいのは目に見えている。

付け加えるなら、本人には間違っても言えないが真梨奈はこれまで彼氏すら作った

ことがない、恋愛の素人だ。雄の性については聞きかじったことはあっても、男に抱かれたことがない少女が性について理解できるとは思えない。

(だからといって、黙っているわけにもいかない)

このまま口を噤んでいたら真梨奈の言を肯定することになってしまおうし、真相を話せば寛人はおろか千沙子のプライバシーまでもが著しく侵害されてしまう。

どちらを選ぶにしても無傷では済まないどころか、状況次第では八年もの時間をかけて丹念に築かれた樋口母娘との絆も切れてしまいかねない。

「……ふうん、そう。言えないんだ」

迂闊な返答ができないだけに二の句を告げないと、真梨奈が目を細めた。

「いいよ。それじゃ、このいやらしいヤツはママに渡して、パパが何をしていたか全部バラすから」

「ま、待ってくれっ」

こんなものを手に本当は千沙子を愛していないんだと吹聴されたら、それこそ婚約が破棄されても文句を言えない。凡そ考えうる最悪の事態を止めるべく、真梨奈が回収しようとしていたデイスケケースを掻き集める。

「わかった……話す。話すよ」

為す術も無く、十歳年下の美少女に二十八才の男は白旗を揚げる。葛藤と不安に曇った寛人の双眸に、名も知らないAV女優が無神経な媚笑を投げかけていた。

殆ど公開処刑に近い告白と懺悔がようやく終わりを告げる。

寛人は羞恥の査問から解放された安堵と、墓まで持つていくつもりだったセックスの事情をぶちまけた反動で、ぐったりと疲弊していた。

(これで、少しでも真梨奈ちゃんが男の性に理解を示してくれるといいんだが)

何せ、これまで誰にも話したことがなかった男女の秘事を、よりにもよって義娘となる女子大生に目の前で暴露したのだ。下手な嘘を吐いて猜疑を悪化させないためにも、克明かつ細部に渡ってアダルトビデオを借りるに至る経緯を語らざるを得ない。

その間、羞恥に苛まれながらも、真梨奈からは強烈なプレッシャーを浴びせ続けられるのだ。疲れるのも当然と言える。

(その甲斐あつてか、真梨奈ちゃんの態度が随分と柔らかくなった)

必死になって釈明した効果もあつてか、真梨奈の態度もある程度は軟化している。怒りを通り越して殺気を放っていた眼光は、ようやく不平不満を滲ませるまで落ち

着き、剃刀のような空気はびりびりする程度には鎮静化している。少なくとも、敬愛する母親を裏切っていたわけではないと、どうやら認めてくれたらしい。

「一応、パパだって、そういうのを借りるのが乗り気じゃ無いのはわかった」

リビングには二人がけのソファしかないため、ガラステーブルを椅子代わりにしていた義娘は、息んでいた肩から力を抜く。真梨奈の言質が取れ、寛人の身体からもうやく綱渡りだった緊張がほぐれた。

「ただし、エッチなヤツを見るのが良いことだとも思って無いからね。パパだって、本当は自分のやつてることが後ろめたいことだつてわかってるでしょ？」

「ああ……うん。そうだな」

本意の行動では無かったからこそ、真梨奈と鉢合わせした時にあんなに周章したのだ。寛人の当惑を実際に見たからだろう。真梨奈の双眸に疑いは宿っていない。

「これからはAVを借りるのは控え……いや、止めるよ」

「ごめん、パパ。悪いけれど信じられない。男の性欲って抑えるのが難しいんですよ？ 今度はバレないようにネットで見始めるかもしれないじゃない」

更正の決意を示すものの、その宣言は出鼻からへし折られた。

(言い方はキツイけれど、言っていることは的を射ている)

千沙子に悪いと思いつつも結局肉欲に勝てなかったのだ。反省した、もうしない、本当だ、と口約束をしたところで、今度はもっと悪知恵を働かせて過ちを繰り返す可能性は否定できない。

（真梨奈ちゃんに不信を抱かれるのは本当に堪える）

義父としての期待を裏切ったのだから、辛辣な評価を下されるのは必罰だ。それでも、小さい頃から成長を見守り、肉親同然に慕ってくれた美少女から信頼に値しないと明言されると、ある意味痛罵されるより精神が堪える。

「ええ……と、あの……ママとセックスできないなら、例えば手とかで……その……射精させて貰うことはできないの？」

寛人の表情から生気が抜けていく様子を見て言い過ぎたと思ったのか。真梨奈は慌ててフォロワーの改善案を提示する。怒りが収まったためだろう。先ほどまでは平然と用いていた淫語の類いが恥ずかしいのか、真梨奈の目線が無目的に左右を往復する。

「できればそうして貰うのが一番良いんだが、声を出すのも辛そうなくらいぐったりしているから難しいな」

「ふうん……そっか……」

美しく理知的な母が、若い男と獣のようなセックスの果てに、あられも無い姿でベ

ツドに肢体を投げている光景でも想像したのだろう。彼氏のいない初心な女子大生は、僅かに頬を染めて逃げるように俯く。

普段が小悪魔的に振る舞っている美少女だけに、その初々しい表情が微笑ましい。

（千沙子さんなら、俺の願いを聞き届けてくれるだろうけれど……）

真梨奈の言うとおり、射精し足りないと寛人が望むなら絶頂に困憊していても放精に導いてくれるだろう。ただし、一回だけならばとにかく、毎回おなじことを要求すれば、千沙子の負担が蓄積していくのは疑いようが無い。

性欲の発散はしたいが、愛する美熟女を己の欲望に振り回すつもりは毛頭無かった。

「……ねえ、パパ。確認したいんだけど、パパって別に年上じゃないと女に魅力を見いだせない——ってわけじゃないんだよね」

真梨奈は何か思案しているのか。長く美しい黒髪に人差し指を流し、くるくると当てもなく扱めた。

「あ、ああ。さっきも言ったけれど、俺は千沙子さんだから年上でも好きになったんだ。それまで付き合っていた彼女は、同じ年か年下の子だったよ」

若い女の魅力に惑わされたわけではなく、アダルトビデオの中身が女子校生物ばかりなのも理由があると、真梨奈には逐一釈明した。この点ばかりは絶対に勘違いも早



合点もして貰っては困るので、真梨奈からの再確認には殊更明瞭に念を押す。

「ふうん……年下でも、いいんだ……」

寛人の力説とは対象的に、真梨奈は独白するようにぼつりと漏らす。女子大生はそのまましばらくの間、髪を弄る指先をじっと眺めていたが、やがて「ねえ、パパ」と寛人に双眸を向けることなく口を開いた。

「ママの代わりに……私がパパの精液、抜いてあげる」

〈体験版終了〉